

アジア都市農村フィールド研究をふり返る

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者名	原,祐二
発行元	農村計画学会
巻/号	37巻2号
巻号補足	
掲載ページ	p. 122-125
発行年月	2018年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



アジア都市農村フィールド研究をふり返る

Field Realities of Urban-Rural Interaction Studies in Asian Mega Cities since 2000s

原 祐 二*

Yuji HARA

つい先日、とある財団助成金受領式において、同じ研究室出身で2000年代からアジア都市農村研究で御一緒させていただいた先輩にお目にかかった。財団助成研究内容から、昔の想い出話となった。あの頃は、アジア大都市近郊の緑地環境保全や都市農村研究がこれからどんどん発展していく熱気があったが、最近の学生はアジア研究への関心がない。でも実は当時も身近な研究者コミュニティの中だけの話だったのではないか、等とやや自虐的に当時を懐かしんだところである。

確かにあの頃、アジア研究は熱を帯びていたと思う。東京大学には1995年にアジア生物資源研究センターが始動、指導教員の先生はじめ多くの先生方が大型研究費を取得され、活発なアジア研究が進められた。航空券の価格破壊も手伝って、2000年代に入ると多くの学生が現地調査に入った。東京大学に限らず、日本の大学全体で国際化の熱があった。そのただ中で現地指導をいただけたことを今も心から感謝している。

さて、当時の所属研究室ゼミで、アジアフィールド研究従事者のバイブル的存在だったのが、McGee¹⁾によるデサコタモデルである。デサはインドネシア語で村、コタは町を意味する。水田農業が卓越するモンスーンアジアの沖積平野立地型大都市圏では、幹線道路沿いの外資系工場を中心として、稲作が養ってきた元来高密度な農村人口を雇用吸収しながら都市農村混在土地利用が拡大す

るというものである(図1)。

抽象的なモデルではあるが、このデサコタモデルがアジア都市研究に与えた影響は大きい。著者も2001年に修士一年でバンコクおよびマニラ研究を開始したが、都市郊外で都市農村土地利用混在が現在進行形で進んでいる現場を目にし、そのモデルの先見性を体感した。アジア研究が山間部の開発経済学的研究と、都市部の都市社会学的研究に分かれている中、急速な都市化を正面からとらえ、その動態的な土地利用をカオスと切り捨てずに正面からメカニズムをとらえようとするデサコタのフィールド研究の魅力にとりつかれた。ちなみに、2006年の都市計画学会のプレシンポジウム以降、何度もMcGee教授その人がカナダのプリティッシュコロンビア大学から国内外会議に参加下さり、その明晰なプレゼンテーションと、高齢を感じさせないフィールドでの健脚ぶりに、地理学者かくあるべしと多くを学んだ。

さて、アジア都市農村研究を進めるにあたり、現地のカウンターパートは決定的に重要である。アジア各国では、大学教員は完全なエリート層であり、欧米の大学で教育を受けている場合も少なくない。このため、グリーンベルトなど整序型の土地利用計画論の単純適用といった議論に陥りやすい。また、所得格差も大きく、まだまだ階級社会であることもあって、自分自身で水田の土にまみれるなどのフィールドワークを避ける傾向がある人もいる。そのような中、幸いにも、指導教員や関連の先生方の御尽力により実現した、トップ合意による組織間提携が追い風となって、現地調査にも精通し科学的議論が進められるすばらしいカウンターパートの先生方、学生さんに恵まれた。形式的に面子を重んじる文化風土のもとでは、特にそうしたトップダウンの連携が現地調査を容易にすることがある。当時は末端の自分にはなかなか目に見えない力ではあったが、多少中間管理をする立場になった今になって、当時の先生方、組織のすごさが身にしみて分かる。感謝の念しかない。

そうしたカウンターパートとの関係が強化され、その教え子が大学院留学生として出身研究室に留学してくる

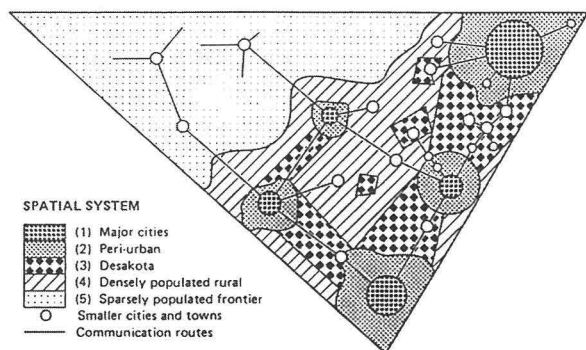


図1 デサコタモデル

Fig. 1 Desakota model

*和歌山大学 Wakayama University

キーワード：1) アジア都市農村, 2) デサコタ, 3) 区画ダイナミクス, 4) 地形改変, 5) 国際共同研究

ことも多かった。こうしてさらなる連携が強化されるわけである。そうした留学生のチューターをさせていただく中で、自分の語学力も磨かれたし、日本がいかに外国人にとって生活しにくい場所か思い知った。基本全て文書は日本語だし、不動産関係も日本語ベースでの交渉となる。隣人の騒音がうるさいということで何度も大家さんに交渉にいった思い出もある。(これを機に配偶者に恵まれたので、個人的には非常にハイリターンだったわけだが。) また、もちろん一般化できるわけではないが、階級社会でメイドさんなど人を使うことに慣れている場合、手強い。研究室の大掃除にもうまく参加できないなどの問題がある。そうした研究外の日常生活で生じる多様な文化衝突的場面をともに乗り越えてきたことで、信頼関係が強化され、帰国後にさらなるカウンターパートとして協同してくれることになるし、それをお互い期待しているところでもある。かくいう私も、人生25年実家生活を堂々と満喫した後スイス短期留学に臨み、ルームメイトに日本人は使えないという印象を強く残した。研究以前に衣食住自立して生活しろというわけだが、その時やり合った友人は今でもいい絆になっている。本学会で定例化している日韓シンポジウムも、実はこうした留学生つながりが一つの縁となって開始されたと理解している。出身研究室博士卒業生の方が初動に中心的な役割を果たされ、初回のシンポジウムに私も抱持ちで伺うこととなったのである。

さて、肝心の研究内容である。現地で何をしてきたのかというと、土地所有区画単位で動態的に成立している、アジア都市郊外のデサコタの地域における地域生態系の変容現地調査である。と書いても分かりにくいので、バ

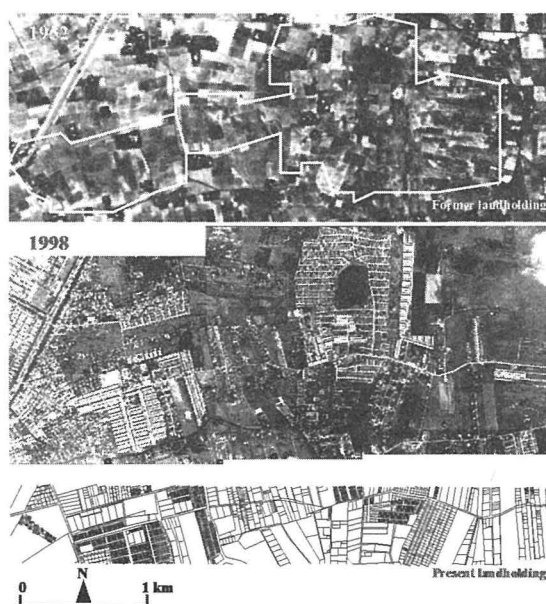


図2 水田区画の細分化による開発²⁾
Fig. 2 Land fragmentation in Bangkok

ンコク郊外の事例(図2)を示す。

この図は現地当局とのタフな交渉の上で入手した地籍図に位置情報を持たせてデジタル化し、これまた紆余曲折を経て購入した新旧空中写真と重ねたものである。2000年当時は今ほど地理情報データベースがなく(グーグルアースもなかった)、とにかく各所に散在しているデータを入手しに何度も関連事務所を訪問したものである。そうした際、カウンターパートの現地学生さんの存在は要であった。この図をみると、大規模な水田区画がどん詰まり私道による面的土地開発により細分化され、緑地環境も物理的に変容していることがみてとれる。区画が小さければ緑量は少ない。さらに、緑の質にも変化がある。造成された新たなゲーテッドコミュニティには装飾樹と緑陰樹が多いのに対し、コンクリートブロック塀を一枚隔てて隣り合う既存の水路沿い農村集落には堤や庭に昔ながらの果樹が多く残存している(図3)。

さらに、土地開発は垂直的地形変化をもたらす。図4はこれまたバンコク郊外の事例だが、海拔数メートルのデルタ地帯であるため、旧来の水田に土盛りして宅地化している。その土は隣の区画からとり、跡は養殖池になる。こうして都市郊外にダイナミックな区画単位の湿地生態系が創出される。そこに生物が適応する。図5はシロスキハシコウ(*Anastomus oscitans*)のルートセンサスの結果であるが、池、運河、水路、水田などダイナミックで多様な湿地環境を活用して生息していることが分かる。そして動態性は土地利用内部にもおよぶ。湿潤熱帯だけに米の多期作は当たり前で、田おこし区画の横で刈り取りしていたりする。養殖池もナマズやティラピア(現地では今上天皇からの贈り物として有名だが)の成長にあわせ水位を変え、定期的に池干しも行う。鳥類にとっては常時ジャンボタニシなどの貝類や昆虫、カエルなどが地域内で供給されている状況だ。留鳥化するのも自然な流れに思える。

さて、鳥など移動性の高い生物にはこうした動態的湿地環境は幸運な空間なのかもしれない。もちろん、都市

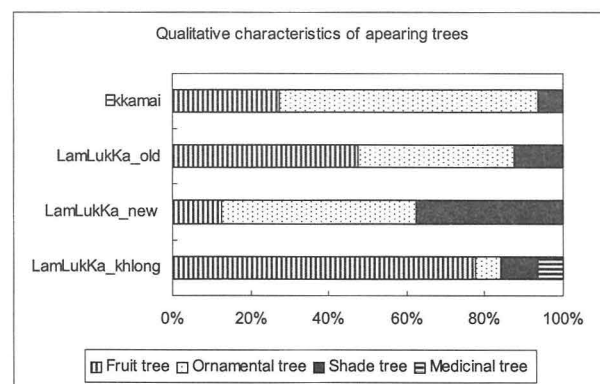


図3 バンコク新旧住宅地における出現樹木(未発表)
Fig. 3 Tree varieties in land developments in Bangkok

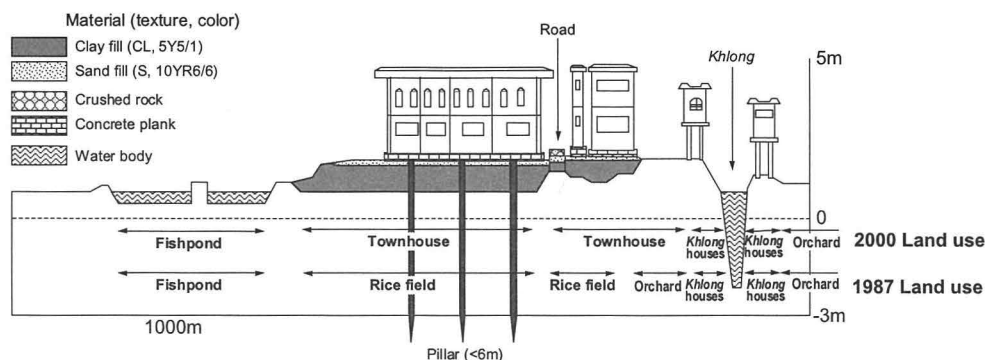


図4 凹凸改変による土地開発例³⁾

Fig. 4 Landform transformation in Bangkok

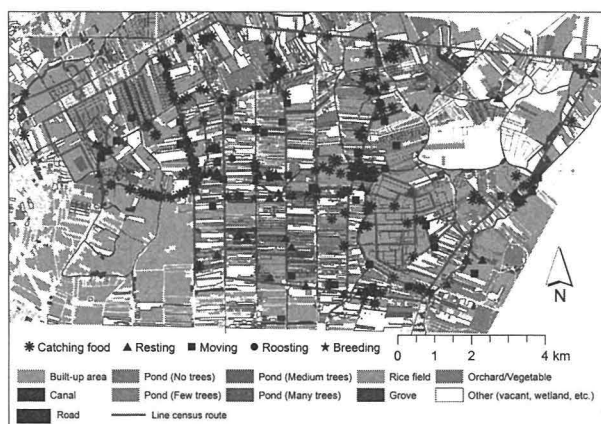


図5 シロスキハシコウの動態的湿地への順応⁴⁾

Fig. 5 Asian Openbills adapting to wetland mosaic

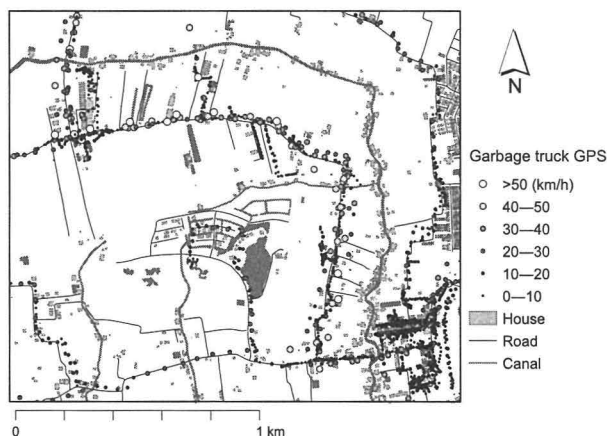


図6 水路沿いの旧集落には行きにくいゴミ収集車⁵⁾

Fig. 6 Traditional villages without MSW collections

化がさらに進展、水路が埋め立てられて断片化し、水質汚染や生物種の減少をもたらすことも考えられる。しかし、広大なデルタに低密にスプロールする都市圏の土地利用を分析しても、動態的な湿地モザイクは人口が増えても減っても持続しそうな状況である。何せ灌漑インフラが整備された均平水田区画に土盛りすれば区画単位で開発できる。平野や区画の規模こそ違うが、現在筆者が居住している日本の地方都市でも見かけるお馴染みの光景だ。そして空中写真からでは分かりにくい、鳥と違って人にとっては意外に障壁が多い空間でもある。図6はバンコク首都圏近郊で当局の協力を得てゴミ収集車にGPSをつけて回収率、サービス提供空間範囲を検証した成果である。道路沿いのゲーテッドな新興住宅地にはサービスが行き届いているが、この土地を開拓した水路沿いの旧集落にはあまり到達できていない。空間距離は近くてもアクセス性、人と人との交流は保証されていないことが多いのである。

生ゴミ堆肥化、生物資源循環などと提唱するなら、こうした地域の骨格構造を理解した上で、人と人との社会的な障壁を分散型で是正していく方策がいいように思う。

むろん最終処分場や浄化槽など、設備投資も重要だが、

その配置を効率化するためにも、土地改変の歴史、必然的な都市農村土地利用混在を理解しておく必要がある。ちなみに、図6の廃棄物調査も、カウンターパートの先生なくして成立し得ないものだった。処分場はウェストピッカーのみなさんが、隣接する賭場で恐れの方々に日銭をその場で吸い上げられているような環境だ。勝手に突撃していたら、自分が廃棄されたかもしれない。自治体と連携して処分場の浸出水処理テストプラントを稼働させていた先生の協力があって潜入できた。そして、その先生は、当時の私の勤務先の同僚だった若手共闘仲間の水環境工学者と同じ研究室の留学生だった。こうした国内での身近な学融合研究が、現地の新たなカウンターパートにもつながる。こうして国内外で分野障壁のない人的資源ネットワークを構築することは、特に現地調査ベースの地域計画学に参与する者には必須の要件であると思う。2000年代半ば、私の助手時代には、どこを見渡しても学融合、学際だった。異分野研究者と協同するためには、同じ対象空間を共有するのが有効だと日々体感した。

ここまで書いて、そういえばこれは農村「計画」学会誌の論考だと思い出し、何かしら計画にふれないといけ



図7 バンコク区画整理パイロット事業地権者説明会
Fig. 7 Land readjustment pilot project in Bangkok

ないのかもしれない、しかし私的土地所有権が強いアジア都市郊外は動態的で計画も何もないのではないかという毎度の想いもわき上がってくる。そうした中でも、計画に関連する、一番印象に残っている場面が図7である。これは、2002年の夏、バンコク郊外で行われた区画整理パイロット事業の地権者説明会を聴講したときの写真である。JICAが長年協力して現地に区画整理の技術移転を行ってきた⁶⁾、その最前線の一コマを見ることができたのはこの上ない幸運であった。当時の先生方、そして右も左も分からない学生にも親切にしてくださった日本政府派遣のJICA専門家の方々には感謝してもしきれない御恩がある。日本の外交は、こうした最前線の方々担っているものであり、日本人学生、研究者、旅行者は皆、そうした先人達の労苦の恩恵を受けていると実感した瞬間だった。

私有水田区画の転用により都市化が進むアジア都市では、ゾーニングによる規制よりも、こうした区画整理を通じた民間開発の誘導がより効果的であるように、当時学生ながら思った。そして、面的住宅開発地で散見される、うち捨てられた遊具(図8)を見るにつけ、世界一律のハード整備より、JICAの皆さんがカウンターパートと現場で奮闘されているようなソフト整備が大事なのだと認識を強めたものである。私なら小一時間で熱中症になりあの世行きだろう。熱帯とはそういう場所だ。だから、いちおう造園に関連する研究室出身ながら、私有区画水田転用都市に公園など正直不要だろうと議論してきた。しかしバンコクの夜の公園で大勢の人が運動しているのをみて、簡単に前言を撤回したところだ。日本もいずれ温暖化でこうした利用に転換していくのかもしれない。

とりとめもなく自分の経験を書いてきたが、曲がりなりにも現在に至るまでアジア関連研究ができているのも、学生時代からの恩師、その他多くの先生方、そして



図8 使われないゲートドコミュニティの遊具
Fig. 8 Abandoned playground inside gated subdivision

組織間提携や個人の信頼関係でつながってくれた現地カウンターパートの先生方、学生さんのおかげである。改めて心より感謝したい。これまでも研究費で日本への招聘や学生も交えた共同ワークショップ企画などを通じて一部でも報恩してきたつもりだが、今後とも継続して共同研究を行っていきたい。共同研究費の確保は、特にアジア現地研究でカウンターパートとの信頼を強める手段であることは間違いないのだから。これを読んでアジアに向かう若者が増えることを少し期待して本論を閉じたい。

引用文献

- 1) McGee, T.G. (1991): The emergence of desakota regions in Asia: expanding a hypothesis. In: Ginsburg, N., Koppel, B., McGee, T.G. (Eds.), *The Extended Metropolis: Settlement Transition in Asia*. University of Hawaii Press, Honolulu, pp. 3-25.
- 2) Hara, Y., Yokota, S., Murakami, A. and Takeuchi, K. (2004): The spatial distribution of green spaces in the urban fringe of Bangkok. *Proceedings of International Symposium on City Planning*, 177-186.
- 3) Hara, Y., Thaitakoo, D. and Takeuchi, K. (2008): Landform transformation on the urban fringe of Bangkok: the need to review land-use planning processes with consideration of the flow of fill materials to developing areas. *Landscape and Urban Planning* 84, 74-91.
- 4) Hara, Y., Yamaji, K., Yokota, S., Thaitakoo, D. and Sampei, Y. (2018): Dynamic wetland mosaic environments and Asian openbill habitat creation in peri-urban Bangkok. *Urban Ecosystems* 21, 305-322.
- 5) Hiramatsu, A., Hara, Y., Sekiyama, M., Honda, R. and Chiemchaisri, C. (2009): Municipal solid waste flow and waste generation characteristics in an urban-rural fringe area in Thailand. *Waste Management & Research* 27, 951-960.
- 6) 日野祐滋・木下瑞夫・岸井隆幸 (2006): 土地制度の観点から見たタイ国区画整理法の意義・特徴に関する研究. *日本不動産学会誌* 20, 98-106.

Keywords: 1) Asian city region, 2) desakota, 3) parcel dynamics, 4) landform transformation, 5) international research collaboration